

繪本西遊記

初編

三

2500
40-3



2500
40-3

小前田先生編
小二郎一代記 三十
大尾

新説伊藤専三編
星五郎一代記 五十
大尾

怪談 三遊亭圓朝漢述
牡丹燈籠 三十

鹽同
多助一代記 四十
大尾

業同
文治一代記 全

大岡
小西屋政談 十二

近世小説
河内山實録 五十
大尾

繪本
星月夜顯晦録 三十
大尾

大郷穆編
燕山外史 二冊

一御花王様方より御まげん御恩に極々存心御つて御座
年來かた不渡仕仕の御座り申上り申上り申上り申上り申上り
かたは仕合に存心御座り申上り申上り申上り申上り申上り
翻譯書繪入御本御座り申上り申上り申上り申上り申上り
相働申上り申上り申上り申上り申上り申上り申上り申上り
誠光堂謹白

和漢
書物
小説
貸本所

東京橋區弥左工門町十三番地
文永堂 大嶋屋傳右衛門
同牛込區細工町十六番地

繪本西遊記初編卷之三

清
前章之下

孫悟空の顯聖真君が大神通に責討れ空中に飛で行方
と隠したるは時真君李天王が在を所小来り悟空が在一山と同
李天王が照妖鏡と擧て四方と照し見え大さの笑ひ
は猴圍と出く真君の住む灌江口へ迎を行く真君是を
やめて忽ち中天へ身と躍らせ灌江口へ急ぎ入其時悟亦お
のが身と真君の廟中に座してつらら真君の回るを
看て如意棒と拿て跑ぶ真君ののが後よりと遊ぶは傳
花果山へ追つての我うたるは時天上の玉帝らら



ダ
コ
ラ
見
分

悟 抛 金 老
空 擊 琢 君



李
天
王

哪
吒

悟
空

大

軍の形勢と人孫りんとて観音菩薩太上老君と侍ひ南天門
に出御あり遙に下界と見えと爲し又は李天王哪吒を子は
照妖鏡と擧げて空中のまゝばらまらくの天将華果山の四方
と十重二十重のうりかこま真君と悟空の真中のうりて相戦ひ
り果さきとるもえざりたり観音菩薩とれとて推すもい
水瓶を悟空が頭に投的んとし又は時に上老君れとてめ
むひの瓶原末磁器なれば渠が鉄棒にちあてたらんよの忽ち
微塵に碎くべし我一周の圈子と持てり是と金鋼琢とちやと
金鋼套とも名付けて不思議なる寶貝なりこれとてつては
猴とおべしとて下界に向く抛下し又はあやまるは悟空の頭
の正中に撲的と中もあさしもの悟空足とるもばらまらる

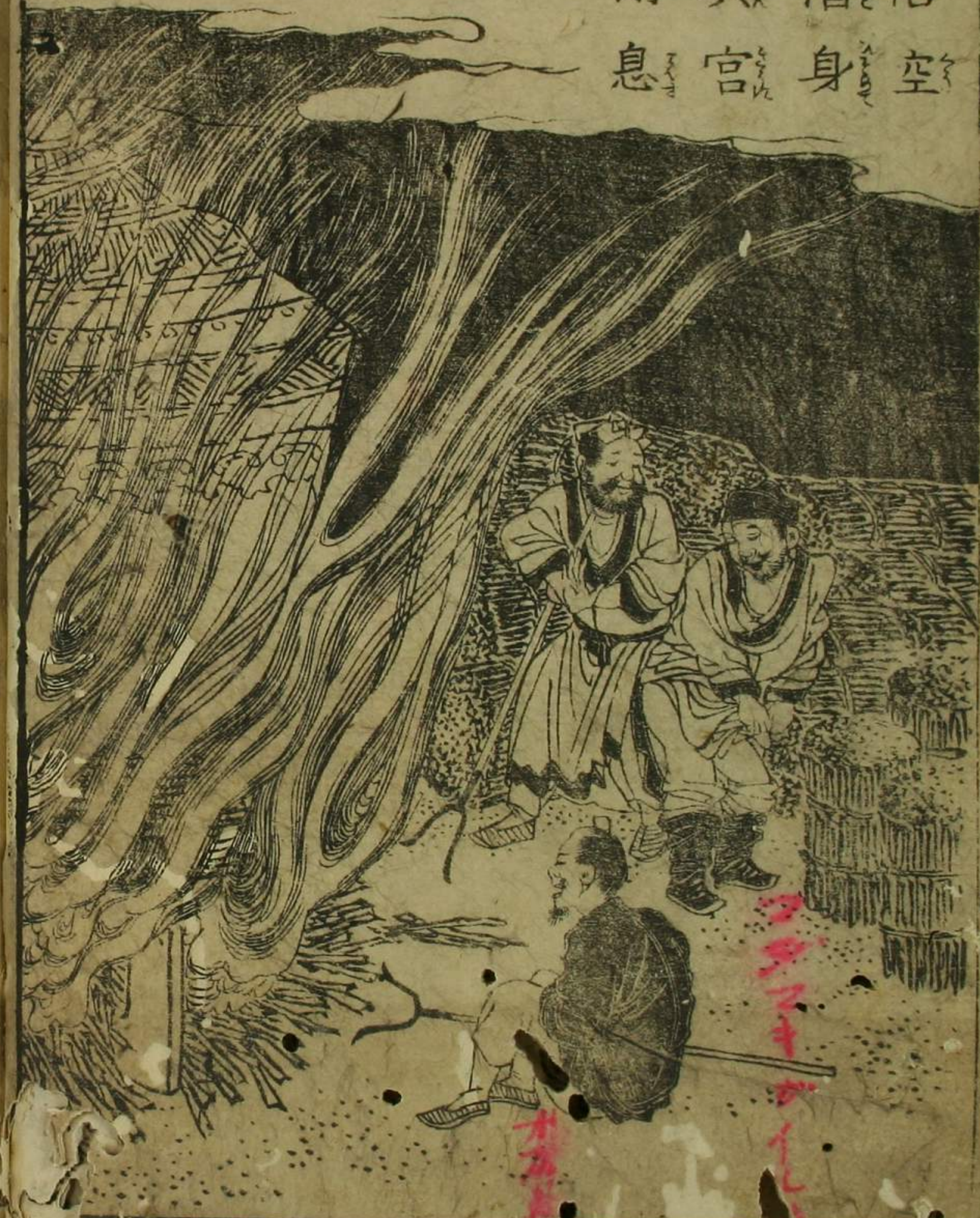
怪まらり其時具君の細太死本りて根と啞えくしりけ
せは四十六尉二将軍真君と共とてうりかこまらるる遂に悟空と
高き小のいしりめ琵琶骨と歯牙とをひ変化とることを得
ざらし師とやとめ上天とて陣しとる

八卦爐中逃大聖

五行山下定心猿

さるほどに玉帝君の孫悟空が罪さこまらる上りよるし斬罪
行するたしと大乃鬼王に命とて斬らせ玉に只母の軟損は
るのこまらるも悟空が身に傷はくはは是に依て大
上老君の内斗ひりて悟空とてうりて乾坎艮震巽離坤兌
の八卦爐中へおし入を敷きの道人よ命とて是と焼せしむ悟空

悟 潛 異 閑
空 身 宮 息



悟空

會 不 百 年 也 力 無 人 以 以

則巽宮に續り入らざれば巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
吹け眼を開く事ありと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
て潜るゑり既に四十九日と云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
とひいゝ丹を取出さんと其の時悟空身を躍らせて爐中と
走り出耳の中より如意棒と制事出ししと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
亦是が如く天上混乱と云ふ事大うさるる巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
君自ら三十六員の雷符を引率し靈霄殿の前に就くことす
斗悟空とてししひるむけしれなく身と交りて三頭六臂と
なり如意棒と三條の髪と鬚と奮ふと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
は勢ひよりなりかく我いあぐみてんえにたりけし西方の釈迦
牟尼如来迦葉阿難の二尊者と引はれ靈霄殿にさ
まひ天將とて我いと止させむと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
奉相と現し如来の前に進もうと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
取の者たれば爰に未づく我戦ういと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
聞て笑ひむ我の西方極樂世界釋迦牟尼尊者南無阿
彌陀佛なり我が天宮は閑寂と静らんといふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
你の何なる道を修し得らるや悟空曰く我の天地生成の
老猿筆果山水簾洞の王たる不老長生の法を授けし雲の
風に御し一瞬に十方八千里を往く如来の曰く你我掌の中
のほりてよく山中を跳し人や悟空大に笑ひ如来いふに
かく黙子たるや我通か八十萬余里と飛行せんと云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相
你の掌の中におゐると云ふも巽の風なり火なりと云ふも巽の風相

巽の風なり火なりと云ふも巽の風相

雷之戦悟と祐
殿之靈空と聖



悟空

祐聖夏君



日本西遊記卷之三

五

上ノ白雲と云て是にち乗る八九万里も遠行せしがその
所ニ赤き大ひかる柱の五根やぞかうひまらう悟空の
体になく一根の毛と抜て糸と糸一正中の柱に齊天大聖王
到此一遊すと書記しやうと雲と飛て如来の座にまゐり我
八九万の遠き國に至り五根の柱に記鶴と留り回す
其時大きに罵て曰く你野猿の徒何事とや後し待らるや先
より我掌の内への往來しと敢て躍り出る事なれど你が
五根の柱と見し我指たる熱い一六は指と云よとめり
あやしとほらうひきて見とんれば如来の右の席の中指り
齊天大聖到此一遊すと我等踏すと喜付ら此に至て悟空
大きにおどろき急ぎ掌の中と飛下らんしせし時如来
翻して手中に掲げ西天門よりおひ五指と化して五
かゝ悟空と山の下に押入を唵嘛呢叭咪吽の六字と金書し
たる札と山の頂にさし付る土比神祇にあせて悟空を守護
せしめ饑時ハ续九とあゝ渴するゆい銅汁と呑しめ果す火
充てくの救ひを待しめよ

我佛造經傳極樂

觀音奉旨上長安

光陰流るごとく日月梭と擲るよう滴をす既以五百余年と
経るに如来西天の雷音寺に在して法華經の三藏と南
瞻部州に傳へんとて觀音菩薩と召しと鄭欄の如
の錫杖并に三つの緊縮兒とあゝ東土に倒る三の怪



悟空自驚
在佛掌中

孫悟空





金剛經卷之四

其二



悟空

金剛經卷之四

取るべき人と需りしめり觀音菩薩謹

子惠岸とめしはれ東とて立出ま入れば

大河の岸に至り玉ひ其河幅の廣大なるを

勿心は河あふむのでく巻上りそのうららか

よに寶杖と提波と踏まき岸より菩薩に向

ば惠岸面前に立まき何者たるぞ不礼なり

然魔をくつたりたつみわいつねるめぞ惠岸の曰く我、托塔

天王の二太子木又惠岸是も在る則我師父南海觀音菩薩

かへり妖魔是とめて大きに驚き寶杖と投して菩薩乃

前に蹲はき謹くやうら我の原天上靈霄殿より有く捲簾の

大おわりしう玻璃の盞とお砕き一罰れよつく鞭打はく

奉八百餘に下界へ逐下されは河中に氷と志づり常に

食乏しく飢にうきそたあく往來の人あれは是を投

て食となげ今も菩薩の來迎と志らば凡俗の僧あり

とおのり人ともくこゝんとおのひしを罪ふくふらう

たれ唯望らうく大慈大悲の菩薩あられを墮れ玉ひ

我けらうくを救ひむく世々生々の大恩こそ、期あふ

づつはと洞瀑布なりて告あるらとれは菩薩も

がしりし你天上を罪と犯し下界にまき殺すとかに

さよに滅罪の期らうく我今東土に行

需りんとし你早く善果にゆしてうの徑と

西土に來、如來とおせ其の罪と免され

平勝に

今承、耳弟

流、可、不、子

氣、な、る、妖、魔、の

何、者、た、る、ぞ、不、禮、な、り

我、の、師、父、南、海、觀、音、菩、薩

大、河、の、岸、に、至、り、玉、ひ、其、河、幅、の、廣、大、な、る、を

勿、心、は、河、あ、ふ、む、の、で、く、巻、上、り、そ、の、う、ら、ら、か

よ、に、寶、杖、と、提、波、と、踏、ま、き、岸、よ、り、菩、薩、に、向

ば、惠、岸、面、前、に、立、ま、き、何、者、た、る、ぞ、不、禮、な、り

然、魔、を、く、つ、た、り、た、つ、み、わ、い、つ、ね、る、め、ぞ、惠、岸、の、曰、く、我、托、塔

天、王、の、二、太、子、木、又、惠、岸、是、も、在、る、則、我、師、父、南、海、觀、音、菩、薩

か、へ、り、妖、魔、是、と、め、て、大、き、に、驚、き、寶、杖、と、投、し、て、菩、薩、乃

前、に、蹲、は、き、謹、く、や、う、ら、我、の、原、天、上、靈、霄、殿、よ、り、有、く、捲、簾、の

大、お、わ、り、し、う、玻、璃、の、盞、と、お、砕、き、一、罰、れ、よ、つ、く、鞭、打、は、く

奉、八、百、餘、に、下、界、へ、逐、下、さ、れ、は、河、中、に、氷、と、志、づ、り、常、に

食、乏、し、く、飢、に、う、き、そ、た、あ、く、往、來、の、人、あ、れ、は、是、を、投

て、食、と、な、げ、今、も、菩、薩、の、來、迎、と、志、ら、ば、凡、俗、の、僧、あ、り

と、お、の、り、人、と、も、く、こゝ、ん、と、お、の、ひ、し、を、罪、ふ、く、ふ、ら、う

た、れ、唯、望、ら、う、く、大、慈、大、悲、の、菩、薩、あ、ら、れ、を、墮、れ、玉、ひ

我、け、ら、う、く、を、救、ひ、む、く、世、々、生、々、の、大、恩、こ、そ、期、あ、ふ

づ、つ、は、と、洞、瀑、布、な、り、て、告、あ、る、ら、と、れ、は、菩、薩、も

が、し、り、し、你、天、上、を、罪、と、犯、し、下、界、に、ま、き、殺、す、と、か、に

さ、よ、に、滅、罪、の、期、ら、う、く、我、今、東、土、に、行

需、り、ん、と、し、你、早、く、善、果、に、ゆ、し、て、う、の、徑、と

西、土、に、來、如、來、と、お、せ、其、の、罪、と、免、さ、れ

平勝に

波悟浄
謁觀音
大士



沙悟淨



惠岸

觀音

西遊記卷之三

會不百詩已刀

我西と接し
 事のいさよーさよ我は何かに居るとして
 さらんとて空に來る人九人あり我らとて
 吃つおも其九つの骷顛のうらまを中
 なる只羽毛のごうほろたごよふかくの
 ぐさのバ只思らくは後徑とる人ば
 打笑ふての玉く你かたうは是と
 徑と取る人をしては所に來るべし
 おのほろ用る時りるべきる你が
 一とて則法名と汝悟浄と賜り雲に
 は妖魔再おしと恩と謝し水中に入
 候と流し
 我西と接し
 事のいさよーさよ我は何かに居るとして
 さらんとて空に來る人九人あり我らとて
 吃つおも其九つの骷顛のうらまを中
 なる只羽毛のごうほろたごよふかくの
 ぐさのバ只思らくは後徑とる人ば
 打笑ふての玉く你かたうは是と
 徑と取る人をしては所に來るべし
 おのほろ用る時りるべきる你が
 一とて則法名と汝悟浄と賜り雲に
 は妖魔再おしと恩と謝し水中に入

寢に又ひとりの高山あり福陵山と号
 穴洞と名付くは洞に住妖魔はう面
 釘鉞と執て狂風を發し土砂を飛し
 に馳來る惠岸をよとて狭棍と
 彼妖魔我らひながら声とよと
 が曰く我ハ南海觀音の弟子惠岸
 て東方に赴くそやく路をひき通し
 て持る釘鉞とからとと投とて再
 怒し我らとと天河の管天蓬元師
 て嫦娥に戯も玉帝の怒りと蒙り
 其の怒り路と踏錯し斗ら原も猪
 の胎中に入ると今かくのと形



大士饒解小
龍罪責

觀音

惠岸

會入百生己の編



繪本西遊記初編卷之三

なれりおもふに贖つる業もなきは常人の取らぬて月火
るし衣をば悪行といふと止れんや示し教ふるといふ
菩薩聞て宣く你かくのごとく悪心を改むらん日々に其罪深
まらば正果を得るの期あるべし及ばば東土より廻
るに西天に至らん人所よまらば一你其人の父子をた
西天に至て佛と合せ災患消滅し衆界の生と徳一として
是も法号と賜ひて猪悟能と名付むん妖魔喜奉かざり
たう乳浮して洞中に居るも菩薩と東に向いてをさむん
空に二條の龍あり空中に在る菩薩と見ると叫ぶま
菩薩んはいつくの龍ならん空に在る罪と多うやと
かの龍答て曰く我の西海龍王の子と云う殿上の明珠を焼くる
罪によつてかくのごとく虚空に吊上られ日ごとに鞭打るべきや
二百もの龍に誅せられんと及希くは菩薩我命を助けよ
菩薩とすむん則渠がいさし解き饒く你白馬と云ふて
徑と取人よまらば西方にありて切と云ふと云合の洞
の中に放ちやりむん其所をきて東の方と看むる窟に
山の上は金色の光り輝きと其は惠岸菩薩の向ひてや
くわいの光りまはる山を蟠排會とかき乱しと齋
如来の封と云ふ五行山より金字の壓帖則か
まらして看むん善薩則其言にほひの山上にありて
帖子と云ふ一絶の詩と傳へむん

堪歎妖猴不奉公

當年狂妄逞英雄



自遭我佛如来困

何日舒伸再顯切

かく旅と山とあり悟空が在所とたはらひし土地山神が
出逢悟空が居所に逢きまはる悟空原来石の匣の
られまはるといふ術も身一分と動く事ありしは菩薩
よりて你哉とん知りしやと同まへる悟空面と上げ我
你とん知りしや南海普陀落迦山の大悲大悲の南無觀世音
菩薩とん知りしや向に如来我と山に壓へ置き己に五百余
年と経れしと取し一人も身のみ同者なり我今前非を悔し
罪業と免んとし我とん知りし大悲大悲を垂れて我若患と
菩薩是とん知りし諭して宣く我今如来の作と蒙り東土大唐

國にありし経と取し人と尋ねし人を得し你其が弟子と
西天に至りて我佛門と修行しよかまらぬ罪業をなれ極楽の
果と得し悟空の曰く我何事に於ても菩薩の作に
ならんをやく経と取る人とならばてはふに
かたき契約となし菩薩の東の方へ死去りむひし大唐國
至りし師弟と病も疥癩の瘡僧と形ちと長安城
に今西天に赴くべき人を尋ねむひる

陳光蕊赴任逢災

江流僧復讎報本

梓長安城とありし周秦漢よりこのころ歴代帝王の都りて
龍盤虎踞の上邦なり唐の太宗皇帝貞觀十三年丞相魏

劉李殺
陳生奪
其妻



徴が奮によう天下に詔りて偽流明敏の者軍民に抱らば長
安城に來つて應試せしめあまに海加の人の陳草字光
とのふものちり學へ五車に富みの七歩にあり長安に來
し選にあつて状元と賜ひに加の國王に除せられ丞相
の女温嬌と名をよと娶てままあともい故卿にうり其母張
氏と推乃とくは加に赴んと其途に萬花店といふあり
母張氏後條の病に條をまわするに光慈母に食と勸めん
こそ鯉魚一口と買て斬く煮んと食せらば鯉眼より金光を
放ち一身金色とてよのほの鯉魚にあは光慈の甲を
に湖の中に免し紋とむむお母の病といふこれと
まゝく狀元のあらざればかくて日般と修りたけり又公の首尾も

よろしからしとて其知に一軒の房屋を賃て母と幼田を
宿の王劉小二とらる者によろめあつて其の
まゝの温嬌と引具しては加といふところ其道中洪江と
いふ大川あり後りの船とりとて夫婦ともよと推乃く船に上
るるが梢水劉洪李彪の二人温嬌の美色と入る勿心まら悲
心を世渡り川中へ船を出し終に光慈とあ殺し北とら中に
沈め歎き叫ぶ温嬌を引けれ公の仔よ妻と持し劉洪自
から陳光慈と名をよりに加に赴き國王の任にまき
温嬌の姿を恨とをよと折と見え合夫の敵と討
役に劉洪にまきひぬさるると洪の川中へ巡海夜叉
とて死とらうて龍宮に居り龍王のくこやよと龍王其死

昔の西遊記の龍宮に居り

龍王
垂隣
復蕪
光蕊



會本西遊記初編



會本西遊記初編

とよりいへて是に四我と救ひ助けける思人より何故に川
 中に殺されざるや命を救ひく前日の恩と報せざるを切
 光慈の魂魄と求めし你ハ何所の人又何故に妾に妻とすれ
 たるやと問ぬも光慈は魂魄と曰く小生の陣光慈とては品
 の者ららば及ぶに選りしに死に赴く如け川のつじのり對峙我
 妻の色にやい我と女殺しと妻と集ひて逃げまふなり龍王
 何れを垂れし我を救ひよとら龍王聞し先生心を安じ
 玉人下前日放し玉ひ一金色の鯉ハ我たるは恩を以てかきん
 先生を救ひまはしとてかの屍の中に定顔珠と命をせし
 龍宮の畜へ置時と待て魂とかへ其仇と報せしめん光慈
 恩と謝し志ばら龍宮珠に止まりたる

池清

何の毒殺のれし行
 玉人下前日放し玉ひ一金色の鯉ハ我たるは恩を以てかきん
 先生を救ひまはしとてかの屍の中に定顔珠と命をせし
 龍宮の畜へ置時と待て魂とかへ其仇と報せしめん光慈
 恩と謝し志ばら龍宮珠に止まりたる

池清

英石女夢の實花春の片とをば

